岐阜新聞創刊140年記念特集

三菱一号館美術館共同企画

「1894 Visions ロートレックとその時代展」開催記念対談

あの頃の新しいは、いまも新しい。

東洋と西洋の出会い、新奇と伝統の衝突。世紀末パリに花開いた新しい感性は、どんな世界（ヴィジョン）を夢見たのだろう――。
19世紀末期は、勃興した都市文化の中でさまざまな価値観が新旧交代しながら、
大衆が新しい感性を目覚めさせていった時代であった。
混沌から生まれるそのエネルギーには、ニューノーマル時代に直面する現代人にも共感できる部分が多い。
百花繚乱の世紀末パリの感性を一堂に集めた
「1894 Visions ロートレックとその時代展（1月30日[土]～3月14日[日]）」が、
まもなく岐阜県美術館にやって来る。
その見どころと、これからのアートの目指すべき方向について、
東京大学大学院教授で西洋美術史研究第一人者の三浦 篤氏と、
東京藝術大学教授で岐阜県美術館長の日比野克彦氏が対談。
司会は岐阜新聞社の杉山幹夫 最高顧問が務めた。

（2020年12月25日[金]　三菱一号館美術館[東京・丸の内] 館内にて収録）

対談が行われた三菱一号館美術館（東京・丸の内）

明治40年代の馬場先通り。右側手前の建物が三菱一号館

Belle Époque

三菱と岐阜が、フランスと日本が、響き合い交錯する斬新な企画展。

杉山　今年は岐阜新聞が創刊140年を迎えます。その記念としてこの対談を企画し、本日はまず東京丸の内の三菱一号館美術館にて先行して開かれている「1894 Visions ルドン、ロートレック展」をご一緒に鑑賞していただきました。

今われわれがいる建物は、明治政府に招聘された〝お雇い外国人〟の英国人建築家、ジョサイア・コンドルが建てた三菱一号館を復元したもので、とても雰囲気がありますね。

今回の展覧会は、その三菱一号館が竣工した1894年という時代に光を当て、当時のフランスと日本の美術界の動向と交流を一覧しようという試みだそうです。ご覧になられて、いかがでしたか。

三浦　今までにない大変面白い構成でした。ルドンとロートレックという非常に対比的な画家2人を一緒に構成して見せたり、同時代のモロー、モネ、ルドン、ルノワールをも一覧させるという企画は斬新です。

もう1つ興味深かったのは、山本芳翠らの日本近代洋画という視点が入っていることです。われわれはどうしても西洋絵画と日本近代洋画とを別個に考えてしまいがちですが、実はこれらは同時代的な現象の2つの側面。パリで活動している画家もいれば、ゴーギャンのようにパリを出て行く画家もいて、日本からパリに行く画家もいる。グローバルな視野で見るとまた違った見方ができるなあと感銘を受けました。

杉山　ルドンを始め岐阜県美術館（以下、県美）の所蔵品がずいぶんたくさん展示されていて、まるで県美を東京でPRしていただいているようで（笑）、これは日比野さんの手腕でしょうか。そして岐阜で見るルドンとは印象が違って見える作品も多いですね。

日比野　県美はルドンのコレクションで世界の5本の指、いや3本の指に入るかな（笑）。県美が開館したのは38年前ですが、そのころ全国で公立美術館が次々に建てられ、各美術館が方向性を模索する中、県美はルドンをコレクションの軸足にしたんです。

オディロン・ルドン《グラン・ブーケ（大きな花束）》1901年 三菱一号館美術館蔵

現在、県美はルドンの蜘蛛の版画をキャラクターにしていますが、あれに代表されるルドンの内面を表現する黒っぽい作品群と、片や三菱一号館美術館が所蔵する華やかなパステル画のルドンとが並び、非常に対照的です。

世紀末というコンセプトで複数の作家をキュレーションすることで、両美術館の学芸員たちが作品に隠されていた価値や魅力をさらに強く発信しようと知恵を絞ったチャレンジが刺激的でした。

マイノリティが気持ちを発信できる新しいメディアが登場した19世紀末。

杉山　さて、いよいよ1月30日からロートレックとその時代展が県美で始まります。

ロートレックといえば、1891年に大型ポスター《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》を発表し、一夜にしてパリ中の話題をかっさらう衝撃的なデビューを果たした作家として知られていますが、今回改めて見られてどう感じられましたか。

三浦　ロートレックは大貴族の家に生まれ、幼少期から大変な才能を持っていた。しかし実は身体障がい者だったんです。少年時代に落馬して脚に障がいが残った。また近親婚を繰り返した家系だったので病弱だった。そのため裕福だけれどもある種のトラウマを抱いた人でした。そんな彼が故郷を出てパリに移り住み、モンマルトルの夜の世界にうごめくさまざまな人々を題材に選んだ。踊り子や芸人、サーカスの人や高級娼婦。世紀末パリの、華やかだけれどもちょっと翳りも帯びたような、そういう世界を、独特の感覚とデッサン力とで描き出していくところから出発しているんです。

その着眼点とデッサン力だけでも十分に卓越した画家だと思うんですけれども、そこからグラフィックアートに転身することで、さらに才能を開花させたのだなと、先ほど見て実感しました。

杉山　今から130年も前にああいうリトグラフのような作品を作れたのは驚きですね。

三浦　そうですね。19世紀後半になってパリの街角には商業的な必要性からポスターが貼られるようになった。ロートレックも最初は油絵が中心だったのですが、ポスターという新しいメディアにパッと反応して、自分の才能をそこに活かしたというのがロートレックの一番素晴らしいところではないかと思います。

杉山　私は10年くらい前にパリでムーラン・ルージュに行ってお土産コーナーを覗いたら、高い所にロートレックのポスターが額装されて何枚も飾られているのを見て圧倒されました。ロートレックのポスターは日比野さんの作品とどこか似たところがありますね。やはり日比野さんもロートレックはお好きでしょう？

日比野　はい、大好きです。最初にロートレックの絵を見たのは中学の美術の教科書でした。泰西名画のページを見るともなしにめくっていた時、ロートレックのポスターに出会って「あ、かっこいい！」と。中学生だった僕の心にも、スーッと入って来て。以来、ずっと好きです。

ポスターが出て来たのはリトグラフという技術で大きな物を安価に大量に刷れるようになったからですが、いかんせん新しく商業的なメディアだった。今でもなんとなく〝純粋美術が上で商業美術が下〟というヒエラルキーがありますが、当時はもっと強くあった。画家たちは「ポスターなんか」と拒否をしたはずです。それに対してロートレックは何の抵抗もなく「それいいね！ やってみよう！」と乗り出した。

ロートレック以前の画家たちは人体や物語をどう視覚化するかという技術面への関心が強かったのですが、ロートレックは裕福さとコンプレックスとのアンバランスさからか、マイノリティなものに対しての関心が強かったと思う。

ポスターという技法や、夜の世界というテーマを選んだのは、ある程度意図的だったかもしれないけれど、案外素直にやれたんだと思います。それこそが大衆が求めていた物だったので、デビューと同時に売れて行ったのでしょうね。

岐阜新聞の創刊も19世紀末ですが、リトグラフも新聞も〝印刷というニューメディア〟だった。140年前、日本各地で新聞が出始めたのは、今でいえばYouTubeやSNSみたいなものでしょうが、大衆の気持ちを代弁する新たなメディアの登場でした。片やパリでは、リトグラフによるポスターが街中に貼られ始めた。同時代で繋がっていますよね。

杉山　ロートレックの魅力は、とにかく色が非常に鮮やか、構図が大胆。それまでの美術の世界から飛び出した、衝撃的な作家であるなという感じを受けるんですが。

三浦　ええ、今われわれが見ても衝撃的ですが、当時はもっと衝撃的だったでしょう。先ほど日比野さんが〝マイノリティ〟とおっしゃった。まさにぴったりの表現ですが、ロートレック自身がある意味でマイノリティだった。だからこそ新しいメディアで今までとは違うことをやってみたいという冒険心も起きた。描線も構図も斬新だし、ロートレックは印象派以上にジャポニスムがはっきり表れている画家だと思うんですが、とにかく「いいものだったら何でも取り入れよう」という進取の気性がよく現れていると思います。

もう1つ思うのは、ロートレックは眼差しが冷徹なんですよ。決してマイノリティたちに同情しているわけではないし、自己憐憫もない。淡々と冷徹に表現している。そこがすごいですね。

日比野 克彦
アーティスト、東京藝術大学美術学部長、岐阜県美術館長

1958年 岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。第3回日本グラフィック展大賞（1982年）、芸術選奨文部科学大臣賞（2016年）、その他多数受賞。シドニービエンナーレ（1986年）、ベネチアビエンナーレ（1995年）ほか国内外の国際展への出品多数。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授を経て教授、2016年より美術学部長に就任。2015年より岐阜県美術館長に就任。

司会
杉山 幹夫
岐阜新聞社最高顧問

岐阜新聞社、岐阜放送の社長・会長を歴任。岐阜県美術館協議会、同館美術館収集委員会のメンバーも長年務めた。藍綬褒章、旭日中綬章など受章。

若き日の日比野克彦も憧れたパリでは世紀末に日本ブームが起きていた。

杉山　この頃のフランスと日本における美術界はどんな雰囲気だったのでしょうか。

三浦　19世紀末のフランスの美術状況は本当に混沌としていました。まず、アカデミスム絵画という伝統的な絵画もまだしっかり存在感があった。山本芳翠がパリに行ってジェローム等から学んだ絵がそれなんですが。それがベースとはいえ、モネやルノワールなど新しい印象派の画家たちも活躍し始め、次第に評価されて行った。またそれを乗り越えようと、ゴーギャンやゴッホ、スーラといった新しい世代の画家たちや、モローなどの象徴派も出て来た。さらにドニやセリュジエら若い世代によるナビ派などが加わってくることで、ちょっとした坩堝状態だったんです。そこに日本の画家たちも留学していったということになりますね。

当時の日本人画家の多くがパリに行ったのは、ジャポニスムの影響もありますよね。1878年のパリ万博が大きなきっかけとなってパリの画壇で日本ブームが起きた。それで日本の画家たちが「ヨーロッパに留学するならパリ」となったわけです。

山本芳翠《浦島》1893-95年頃 岐阜県美術館蔵

杉山　日比野さんがもし19世紀に生まれていたらパリ留学したんでしょうね。

日比野　実は僕の初めての海外旅行先も、最初に海外で展覧会を開いた場所も、パリだったんですよ。僕が藝大生だった1980年代は、ウォーホル等のポップアートがどんどん脚光を浴びていて、「海外に行くならアメリカ」というのが主流だったのに、僕はパリに行きたかった。今でもよく覚えていますが「日比野、お前なんで今さらパリに行くの？」と友達に笑われましたね。

やはりモンマルトルへの憧れっていうのがベタにあって、画家たちゆかりの場所を歩き回りました。曇り空の風合いや、少し色褪せながらもいろんな色が発色している風景が大好きで。パリから帰って、段ボールとか藁半紙で作品を作って行くんですが、そこにもそのパリの印象が強く影響していました。

三浦　いや、これは面白い、意外でした。私は日比野さんはニューヨークというイメージだったものですから。パリに対する憧れを強固にお持ちというのは分かりましたが、じゃあそのパリの魅力って何なんでしょう。何がそんなにわれわれ日本人を惹きつけるのか。やっぱり「自由」という所ですか？ あるいはニューヨークにはないであろう歴史や文化？

日比野　パリの後ドイツに行ったりロンドンに行ったりしたんですが、例えばドイツに行った時に僕の作品を見せると「POP！」と言われたんですよ。POPというのは、ドイツの現代美術やアメリカのポップアートのコンセプト重視・文脈重視みたいな所に繋がるんですが、パリのアートは理論じゃない。もっと根源的な気持ちの部分で体が動いていく。そういうメンタル面が日本人と合うんだと思います。

パリで最初に個展を開催した時、ヨーロッパっぽいと評されたかったのに、「ヒビノの絵はすごく日本的だね」と言われてしまって。でも自分では全く意識してなかったんです。「どこが日本的なんだろう」と。僕がパリの影響を受けて描いた絵が、フランス人には日本的に見える。フランスと日本の共通項がきっとあるんだと思います。

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック《アリスティド・ブリュアン、彼のキャバレーにて》1893年 三菱一号館美術館蔵

杉山　僕はロートレックやユトリロの描くパリの街はすごく好きで憧れていますが、自分とは距離がある街に思える。

好きな街はニューヨークですね。あの富と貧困とが雑然と一緒になったビッグ・シティ。夕方から夜にかけて、コートの襟を立てながらブラブラ街を歩いて、喧噪の中の孤独を味わうのが好きなんですよ。それに較べてパリは静かすぎて。

三浦　いやはや…杉山さんと日比野さんでは、イメージ的には逆かと思っていました（一同笑）

大衆の思いに応えたロートレックは社会と接続するアートの先駆者。

三浦　ところで、美術は本当に広い範囲に浸透しているんだろうか、まだ借り物なんじゃないだろうか、という疑問を私は持っているんです。全国津々浦々の大衆が評価してくれているのか。「そんなものは飯の種にならない」という考え方だってある。日比野さんはどう思われますか？

日比野　先日、ノーベル化学賞を取られた野依良治先生のお話を聞いていたら、「100年前、化学は社会に接続してなかったんですよ」とおっしゃるのでビックリしたんです。100年前の研究者は、社会と接続する必要を感じつつも自分の研究しかしてなかった。しかし今や生活の全てに化学が接続していて、環境問題や医療等の社会課題を解決するために化学が活躍している。同様に、アートはこれから社会とより接続していく必要がある。社会的な課題解決をするために今度はアートが変わっていくだろう、という話をされたんです。だから100年後は「え？ 昔はアートって社会と接続してなかったの？」とビックリされるようにならなくちゃいけないな、と。

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》1891年 三菱一号館美術館蔵

かつて黒田清輝らがパリに留学して帰って来るや、絵画技法への科学的な研究を始めた。藝大の前身の東京美術学校もやはりそういう教育をした。その名残がいまだに残っていて、「美術って専門知識がないとちょっと敷居高い」と思われている。でも、藝大もこれから次のフェイズに入って、社会課題を解決するアートを目指さなくちゃならないと思っています。

その嚆矢というか、社会と接続するアートの先駆者は、アカデミスムから離れて大衆の思いに応えたロートレックだったのかもしれません。

杉山　今や「人生100年」時代。化学が社会と接続したこともそうですが、過去の常識からみると未知の領域に入って来た。ロートレックも、世紀末という時代の変革期にそれまでの常識の殻を破ることで生まれたスターであり、新時代のヴィジョンや夢を体現していたからこそ、あの頃の〝新しい〟は今見ても新しいのでしょうね。

Henri de Toulouse-Lautrec

好き勝手を言っていい美術館やおうちに飛び込んでくる美術館。

杉山　先ほどもコロナの話が少し出ましたが、このコロナ禍の影響で多くの企画展の中止・延期が続く中、お2人それぞれ美術館の館長を務められるお立場から、今後の美術館の在り方について、どう思われますか。

三浦　私は東京大学の駒場博物館館長を務めています。大学美術館は公立美術館とは違うので、そんなに大動員は必要ないけれども、大学の研究をうまく社会的に還元する責務がある。コロナ禍によって広がったバーチャルの可能性や、コラボレーションによる化学変化の可能性など、これからは複数の道を模索していきます。ちょうど今、他大学のコレクションとの交換展を企画中ですが、まさに今回のようなコラボレーション展覧会というのが、大学美術館にも拡がりつつあります。こうした様々な手法を使いながら、さらに社会に環流させて行ければと。

日比野　今までの美術館には教育的啓蒙的な役割もあり、人々が作品から何かを学ぶ場だった。でもこれからは、見る人々が主体となるべきだ、ということで県美では「ナンヤローネ・プロジェクト」というのをやっているんです。

6年前に私が館長に抜擢された理由のひとつは「美術館に来る人の幅をもっと増やして欲しい」ということでした。そこで、美術館が苦手だという人たちを巻き込めるような仕掛けとして考えたのがこれ。何も知らなくていいから、岐阜の言葉で「ナンヤローネ（＝なんだろう？）」と言いながら見てみない？ と誘い込むためのプロジェクトです。

美術の知識のない人でも「俺はこう思う」と言うのは自由。絵の見方に正解はないのだから思ったことを言えばいい。その場を美術館が提供しますよ、という発信をしていけば、より多様性のある美術館になっていくでしょう。

長引くコロナ禍がリモートワークやステイホームを進展させ、ひとりひとりがその人らしさを出せる状況を加速させて行くはず。なので美術館も、自分なりの意見を言える場になっていけるといいなと思います。

またコロナ対応でいろんな美術館がネット上で作品が見られたり学芸員の解説が聞けたりするオンラインプログラムを作りだした。そこで県美でも「アートまるケット／おうちに居ながラー美術館」というのを昨年末の12月24日から始めたんです。今までは公式サイト上で作品の画像を見られるだけだったのが、これはAR（実在の風景にバーチャルの視覚情報を重ねて表示する拡張現実）で、自分の今いる場所に県美の作品を飾ってみる体験ができる。こうやってどんどんバーチャル空間での美術館のプログラムも増えて行くでしょう。

三浦　先ほどの「ナンヤローネ・プロジェクト」には共感しました。美術史の授業で学生たちには「本だけで知識を得たり、押し頂いて鑑賞するんじゃなくて、作品に自分の言葉を投げかけて還って来る物を受け止めることを何度も繰り返して作品と対話するというのがすごく大事だ」と言っています。それをやった学生からはいいレポートが出てくるし、彼ら自身も授業受けて良かったと実感するようで。作品と対話できる人を増やしたいなと、大学人としては思いますね。美術館にしても同じ。単に観ていただくだけじゃなくて、作品と対話できる場を提供して欲しい、今後はそれがとても大事だと思います。

杉山　お二方とも本日はたいへん示唆に富む貴重なご意見をありがとうございました。

三浦 篤
東京大学大学院教授、駒場博物館館長

1957年、島根県生まれ。東京大学教養学部教養学科フランス科卒業後、同大学大学院美術史学博士課程中にフランス政府給費留学生として渡仏、パリ第4大学美術考古学研究所で西洋美術史を学び、1997年博士号取得。1993年、東京大学教養学部助教授。2006年、同総合文化研究科教授。2015年、フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエを受勲。